



グローバルゾーン内の LOFT では3種類の学習方法を体験できる。「Visits」はチューターとの英会話やアクティビティを経験し、「Tasks」はオリジナルのワークシートに取り組む。「Events」の多くはチューターやアシスタントによるプレゼンテーション。盆載に詳しい甲南大生によるハンズオンセッション。

一步先を行く大学に聞きました!



甲南大学

●甲南大学▶1919年学園創立。1951年大学設立▶8学部14学科。学生数は約9000人▶建学の理念に基づき、開学以来、人物重視の教育を行う▶THE世界大学ランキング日本版2017総合順位111-120位



学長補佐・国際言語文化センター教授
伊庭 緑

いばみどり●神戸大学大学院国際文化学専攻博士後期課程修了。学術博士(神戸大学)。2002年ロンドン大学客員研究員。現在甲南大学学長補佐・国際言語文化センター教授。華道真生流正教授。専門は英語教育、英語音声教育。留学生に生け花も教えている。

学内外のリソースを「融合」させて 全学生にグローバル教育を提供

特定学部にとどまらない
グローバル教育を展開

貴学が推進するグローバル教育について教えてください。

本学は、創設者・平生鈺三郎ひらねはらきさぶろうが掲げた建学の精神「世界に通用する人物たれ」に基づき、100年近く前からグローバル人材の育成に取り組んできました。しかし、現在まで国際系学部を置いて置い
てはいません。これは、学部を問わず、全ての学生にグローバル教

育が必要であるとの考えのもとで

本学のグローバル教育のキーワードは「融合」です。日本人学生と留学生の融合という意味もありますが、留学をサポートする国際交流センター、全学の外国語教育を担当する国際言語文化センターに加え、学部を横断したプログラムの策定を行う共通教育センターの3つが「融合」して、全学生がグローバル教育を受けられる体制を整えています。

段階的なプログラムで
学生の留学を促進

具体的な取り組みについて、教えてください。

国際交流センターは、「ホップ・ステップ・ジャンプ」の3段階で留学までの道をサポートする「段階的国際力養成プログラム」を通じて、学生の留学を促しています。ホップでは、まず学内で国際交流できるプログラムを提供します。日本人学生が留学生の生活を

によっては卒業必要単位として認めています。段階的に「国際力」をアップさせ、最後に長期海外留学へとジャンプしてくれることを期待しています。

また、学内国際交流ホップの核として、岡本キャンパスにグローバルゾーン「Porte」(ポルト)を開設しました。ここには目的に応じて3つのエリアがあります。

「あじさいのーむ」は、留学生の支援および、日本人学生と留学生の交流スペースです。「KONAN Language LOFT」は、英語のみでコミュニケーションするエリア。国際言語文化センターの教員やチューター(留学生が担

当、アシスタント(留学経験のある本学学生)が、ワークショップやアクティビティを毎日開催しています。3つ目の「グローバルラーニングコモンズ」には、使用言語の制限がなく、「英語を話すことに抵抗はあるが、異文化の空気に触れてみたい」という学生が集まれるスペースとなっています。

この場所を一部の学生のみが使用するのでは意味がありません。そこで、1年次の必修の英語授業に紐付け、成績評価に反映させています。グローバルゾーンで開催されるイベントに参加して10ポイント貯めると、成績の10%に評価されるしくみです。

正課のキャリア科目にも
英語学習の授業を導入

語学教育についての取り組みを教えてください。

以前、外国語科目は1、2年次に受講するものでした。今はその状況を改め、4年間で段階的に語学力を上げられるカリキュラムに刷新しました。コミュニケーション系の科目も増やしています。国際言語文化センターでは、理系学生向けの英語など、各学部の専門的なニーズを満たす科目もつくっています。

また、本学には「キャリア創生共通科目」という、会計やITなど、キャリア教育につながる実学的な科目群があります。これは1〜4年までの全学生が選択できる正課科目です。どの学部の学生も英語を使う仕事に就く可能性が将来あると考え、本年度からここにビジネス英語を扱う「グローバル・コミュニケーション」という授業を開設しました。

授業を外部講師に委託したのはなぜでしょう?

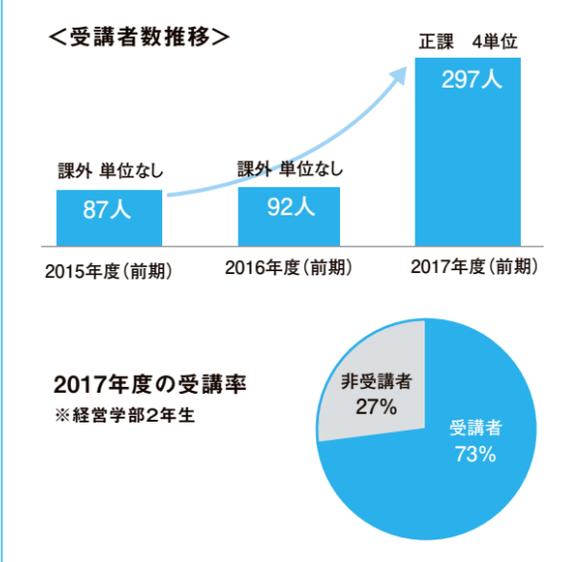
語学教育においては少人数授業が有効です。本学には英語の専任教員が6人、特任は4人います。非常勤講師も多数お願いしていますが、今回週2コマ連続開講の18クラスを増設したので、外部の手を借りられる部分は、アウトソーシングすることにしました。

とはいえ、外部に丸投げしてしまいうわけにはいきません。授業は定期的に見学し、難易度の設定や扱うトピックの内容に改善の必要性を感じた場合、関係者が集まって話し合い、後日、改善されたかを確認しています。また、既存のビジネス英語授業との差別化など、調整が必要な面はありますね。

今後に向けた課題と展望をお聞かせください。

本年度から全学でスタートした授業なので、数値的な成果はまだ出ていませんが、受講者の評判はおおむねよいようです。ただ、この授業はもともと経営学部のプログラムを全学部対象の正課授業に発展させたもの。本年度の受講者はほとんどが経営学部の学生になっているので、今後は他学部の受講者を増やし、より全学的な展開につながるしくみを考えたいと思います。

グローバル・コミュニケーションIの受講者数推移



※本連載は今号にて一旦終了いたします。ご愛読ありがとうございました。